

恒存最後の単行本「問ひ質した事ども」は、昭和五十六年十月刊行、ここに収められた右の評論は、五十三ページに及ぶ大作である。

この長編評論と、表題ともなった「問ひ質した事ども」は、

保守派の現実主義者たる身方を斬るに及んだ「浅はかる所行」と評された様だ。保守派は身方をあるかく批判は

しないとは、女易なる敵、身方思考にとらはれてゐるか。

これでは健全なる論争と、容れある。この論は成立しない。

実際、この「清水幾太郎論」の「總括」では、清水氏の國家観への

疑義を表明するとして、恒存の思想の到達点とも言ふべき、

集團的自己・個人的自己の問題が論じられてゐる。

言ほする、保守派知識人諸氏は、この部分をじっくり讀み

論評すべきである。もちろん革新派知識人諸氏にもよ願ひ

したい。

清水幾太郎論「か」いかん讀まれたかで、日本の論壇の近代化の

レベルの判明するとも言ふべき。しかし、恒存かいかくも

問ひ質した事ども」で再批評してゐる様に、渡部ヨキ一

西義之・小田晋の三氏の座談會での發言を見るに、よく

讀めてゐる、この「露口王」してゐる。當時、この恒存の評論の

重要性を、理解し、論じた文章が、存在したのだろうか。

恒存が、この後、病を得て、論壇から遠ざかつてしまったことは、

何とも惜しまれる。總括で論じられた二元論の考へ方は、

昭和二十年代の文筆活動の出發点より、常の根柢に存在し

てはゐたか。日本人には、なほなじまない思想のなごり。

今後は、理解者はあるまい。(つまり精神面での近代化は

知識階級においてさへ、なほ果たせてゐない) 恒存は、

この「清水幾太郎論」の後、さういふ、純粹な個人的自己について

後ろかく自分を押しつけて来る生のかみ自覺に對する強烈な

意識をもつて、論じてゐた。か、恒存は、こゝ

なへで、早稲田大学で退いた。今さら、解りやういふことも

始まらない。恒存を讀む會、會員たる者、恒存の思想した

豊かにして難解なる表現のせりも、いさかかなりとも理解

せんと、思戦苦闘するより、手だては無しと知るべきである。

構成と要点

経緯	2p
概評	8p
各論	11p
総括	17p

へ経緯

讀後感

かつて友人、先輩に
おける同情を混へた
嫌悪感

戦後の風潮の代表者

清水氏及び「校の選擇」に
對する批判乃至疑義を
與え書き風に重く

へ概評

その一

(一) 気楽で人科の讀みの出来る
傳習生並みのライスト版

大抵るのは何を喋るかといふこと
下はるく、なぜ喋るかといふこと

(二) 説明 説明 主な説明の
辻褄合はせ

(三) 「校の選擇」における防衛の
対象は日本ではるく
清水氏自身

その二

(一) 出トネリ防衛論

右旋廻中であつた清水氏に
神風が吹いた

(二) 出トネリの失敗を取返し

効果を擧げんがため
核・軍事大国といふ
巨大な小道具をも
持てましたのではらひか

へ各論

その一

(一) 終戦の詔勅の奇蹟

原爆投下による終戦

矛盾 出たため

(二) 戦後思想の基本文書は

憲法 第九條

清水氏は前文の正體に
見えなかった

その二

(一) 平和運動と反安保闘争と

核の選擇は過剰な合はせは
失敗した

(二) 「六十年安保」にナチナリズムの

エネルギーといふ表現は
ふさわしくない

自己削製の犠牲づけと
したわけだ

へ総括

(一) 共産主義が清水氏の敵

(メモ・注)

日本の社会科学者のみならず
知識階級一般は、明治以後、西洋の
観念論といふものに、よきもに
ぶつかつてゐない

日本の望み問題は、西洋の観念論を
回避してきた、さうして、傳統と
方法とから、除け者にされた孤立に
堪へられず、つゝにマルクス主義といふ
名の、實質的に身を賣りするものゝあつた
のである。あるいは、マルクス主義を
日本流に實質化したといつた方が
正しいかもしれぬ

論争のすすめ、より

保身の為の小道目
自衛の為の防壁

平和運動

反安保闘争

天皇制

憲法第九条

原爆・核

ナチソリズム・忠誠

(二) 唯物論研究会に賛同を要す
安全とは

自由と進歩に目ざめ 自分を
捨つても 貧乏し人々の為にする
知識人であることの 身元証明を
手に入れたいという 心理的な感

腹背の敵とは

・ 治安維持法・国家権力・軍国主義

・ 共産革命運動・唯物論研究会

ブーリン

オヤゴスト・コント
プラグマティズム

革命運動に引込まれ
しかも自由と進歩の旗手としての
知識人の身元証明を得んとあか

日本近代化の過程における
知識人の革命

共産主義の非人間性という
最も恐ろしいものは、
当然の知識人の對して自らを
最も善者として押しつけた事

しかしその前で 後ろめたことを思えば
知識人の弱さこそが問題

(× 毛、注)

身の安全を保たなかつた
派手な抵抗の姿勢を取り得た地位

最も居心地の良い場所

昭和二十五年の日本共産党

戦術転換

武装革命

治安維持法は廢止

身の安全を求めて、敢へて
危険な場所へと身を挺すること

近代日本の知識人

明治維新

政治系と知識人の乖離はなかった
日本の近代化という同一目的

明治四十年代

非體制派の純粋知識人

ロシア革命後

知識人の性格が變った

後ろめたことによる不毛の

陰うつな感情を味ははされ

さういふ後ろめたさにする

知識人としての 最も限の身元証明を
見出すという 悔めな経験をする

清水氏をはじめ 多くの人の人格と

正め、山崩壊させた當時の

マルクス主義を憎む

しかしさういふマルクス主義の本質を
つかみ、戦後になほそれに後ろ

めたさを感じながら、過去の過

合わせに涙を流してゐる氏には

不快感を覚える

(三) 清水氏の國家觀への疑義

「理想」或はそれに似たものが必要だ

自國の過去の歴史に支へられた
生命力、その連續性、一貫性に
對する「忠誠心」

近代國家の軍は、合理的に物を
考へる、合理的存在だ

「死」の覺悟を要請する組織の
軍事力

「死」の覺悟を要請し得る國民
暗黙の合意が國家存続の前提

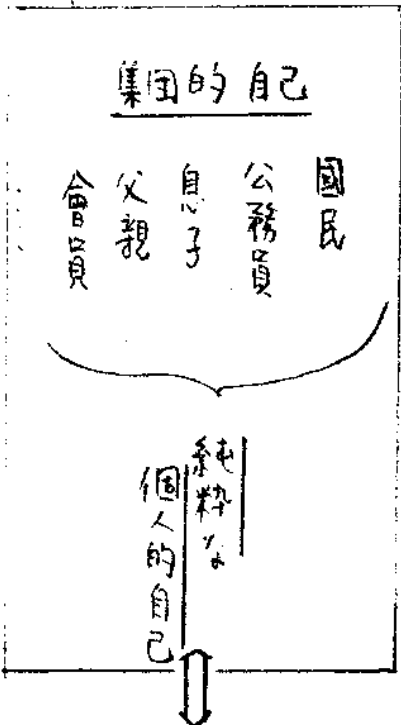
人間本來の利己性を抑へるのは
忠誠心ではなく、合理的な組織の
規律と、それに對する「組織人」としての
自利心である。

近代國家における國家と個人の
分離・断絶の理解できていない

戦時には個人は國家の中に埋没
平時には國家から獨立して
人間同士の附合ふとするのか
近代國家の建前

組織、集團の一員
孤立した個人
↓
共棲

フクシヨンとしての人格



過去の歴史
大自然の生命力

過去、歴史
大自然の生命力
↓
の内容は
どういふものか？

松原正氏講演より
福田先生が「清水論」をお書きにな
った際、いさかなりとも、
「因に返し」な下書きだと感へてゐる。

・社會學

・個人的自己・純粹自我・

孤獨なる人間を認めない

「自分を越えたもの」の存在及び

その「発展」とは、自分をその

「負」とする、集團を意味する

・純粹なる個人的自己が強烈な

意識を以て感じ取つてゐる

「自分を越えたもの」とは、良心で

あり、歴史、及び、自己の源泉と

繋がりである。

・善き國民として、自分を越えた

もの「國家」への忠誠心

善き人間として、自分を越えた

もの「良心」への忠誠心

←

後から自分を押しつけて来る

生のカの自覺に對する強烈な

意識そのものを信ずる以外に

法はない

自己欺瞞と言はれれば

それまでだか、

過去と默契を取交してゐる

以上、連續性・一貫性は

自づと保たれてゐる。

・清水氏の國家観は、

個人と國家の馴れ合ひ

日本的な一元的・家族主義的な

國家観だ。↓甘え

←

これは、國際社會を

乗り切れぬであらう。

對立する
自由がある

講演より

西洋の神學。

後で振り返って、神について

説明しすぎてしまった。

後から押してくる力を

感じとつてゐれば良い